

# 平成29年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成29年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

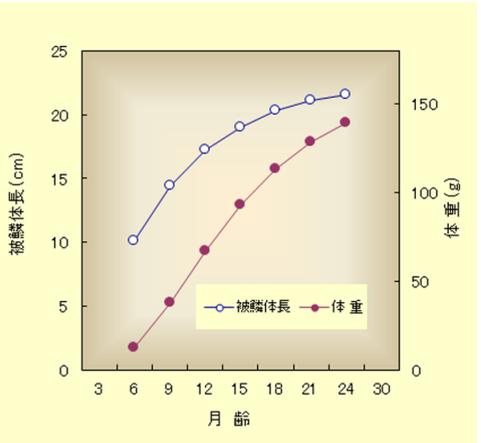
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



## 生物学的特性

寿命： 2歳前後  
成熟開始年齢： 9カ月 (30%)、12カ月 (100%)  
産卵期・産卵場： 10～翌年7月 (盛期は3～6月)、前半は土佐湾周辺海域中心、後半は伊豆諸島～関東近海にも広がる  
食性： 動物プランクトン等  
捕食者： 大型浮魚等

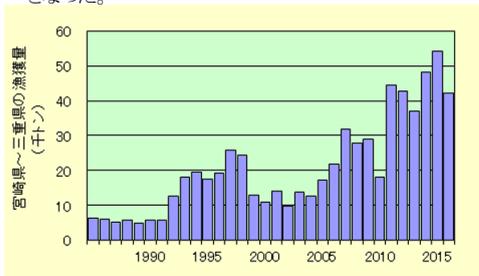


## 漁業の特徴

主にまき網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網、高知県では多鈎釣でも漁獲される。仔稚魚(シラス)期は船びき網で漁獲される。漁獲の大部分は0～1歳である。宮崎県～三重県の漁獲量は太平洋岸各県(宮崎県～千葉県)の総漁獲量の約90%を占める。外国船による漁獲はない。

## 漁獲の動向

宮崎県～三重県の漁獲量は、1985～1991年は5,000～6,000トン台であったが、1992～1998年に増加し、2.5万トン前後となった。1999～2004年は1.0～1.4万トンまで減少したが、2005年以降再び増加傾向となり、2011年以降は4.0万トンを超える年が増えた。2015年の漁獲量は過去最高の5.4万トンとなり、2016年はわずかに減少して4.2万トンとなった。

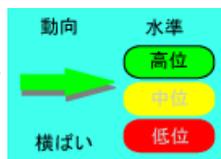


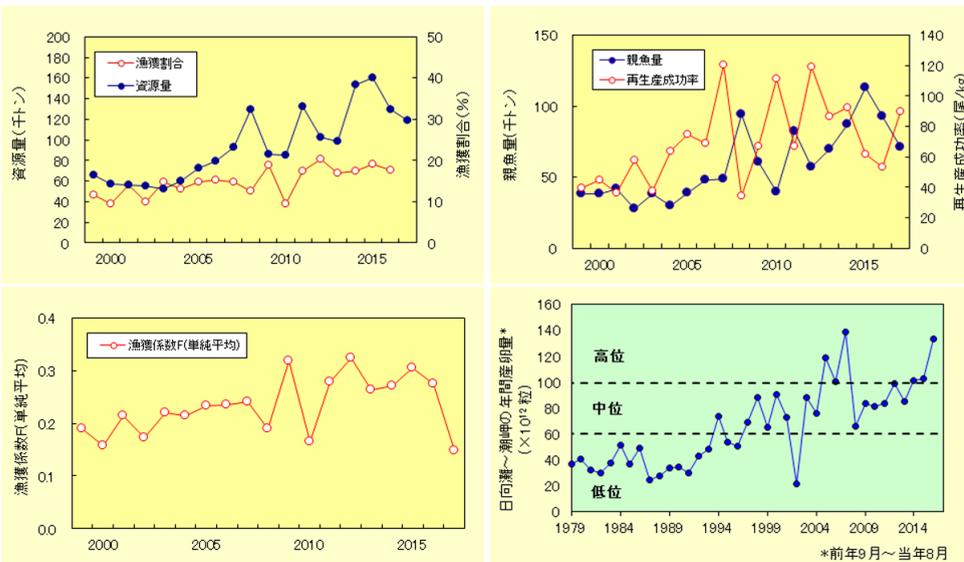
## 資源評価法

1979～2016年産卵調査の結果から、日向灘～潮岬(コホート解析対象海域に相当)の産卵量を算出して資源量指標値とし、資源の水準を判断した。宮崎県～三重県の漁獲を対象とし、1999～2017年の年齢別・年別(半年別)漁獲尾数等に基づくコホート解析により資源量を推定した。半期(1～6月、7～12月)単位で寿命2歳(24月齢)までの4期とし、半年単位のコホート解析により年齢別資源尾数、資源量、漁獲係数を推定した。

## 資源状態

コホート解析により推定した1999～2017年の資源量、親魚量、加入量は、変動するものの、概して増加傾向にある。2017年の資源量は11.9万トン、親魚量は7.1万トン。再生産成功率には、2000年代前半に比べて2000年代後半以降は高い傾向が見られる。水準は産卵量の最大値と最小値の間を三等分し、高位、中位、低位とし、2016年の産卵量は、高位と中位の境界値を上回ったため、資源水準は高位と判断した。直近5年間(2013～2017年)の資源量の推移から、動向は横ばいと判断した。





### 管理方策

産卵量は長期的に増加傾向にあり、最近年は中位～高位水準を保っている。さらに、資源量、親魚量も概して増加傾向にある。これは、再生産が順調に行われていることを示唆しており、最近年の多い漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられることから、現状の漁獲圧を維持することを管理方策としてFcurrentを管理基準に2018年ABCを算出した。資源が0～1歳で構成され、世代が短いため、年々の再生産の成功がその年の資源量に大きく影響する。そのため、再生産の場となる沿岸の産卵場を維持し、かつ、再生産状況をモニタリングすることが重要であると考えられる。

管理基準	Target/Limit	2018年ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
Fcurrent	Target	40	15	0.23 (-17%)
	Limit	47	18	0.28 (+4%)

- ABC算定規則1-3)-(1)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値(漁獲係数)による漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量
- $F_{target} = \alpha F_{limit}$ とし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた
- コホート解析では、半期(1～6月、7～12月)単位で寿命24月齢までの4期とし、0～5月齢(0歳)を1期、6～11月齢(0歳)を2期、12～17月齢(1歳)を3期、18～23月齢(1歳)を4期とした
- Fcurrentは2014～2016年の1～4期のFの平均値
- 漁獲割合は2018年の1期および3期の漁獲量/資源量と2期および4期の漁獲量/資源量の平均値
- F値は1～4期の平均値
- 親魚量は3期の資源量
- 年々の親魚量と過去10年(2007～2016年)の再生産成功率中央値から2018年以降の新規加入量を仮定した

### 資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は横ばい
- 1999年以降の資源量、親魚量、加入量は、概して増加傾向にある
- 2017年の資源量は11.9万トン、親魚量は7.1万トン

### 管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧を維持することを管理方策としてFcurrentを管理基準としてABCを算出した
- 再生産は順調に行われており、最近年の多い漁獲の下でも、漁獲は資源状態に悪影響を及ぼしていないと考えられる
- 再生産の場となる沿岸の産卵場を維持し、かつ、再生産状況をモニタリングすることが重要である

執筆者: 入路光雄・高須賀明典・亘 真吾・梨田一也

資源評価は毎年更新されます。